《評論連載》

絵本論を探して……小さい母となる女の子たち（第六回）

灰島　かり

そのまた向こうへ

前回は、女の子の冒険の典型的な形として「おつかいに行く」絵本をとりあげた。女の子は母のためにおつかいを引き受け、それはまちがいなく冒険ではあるのだが、男の子の冒険とはかなり異なる。男の子が他者と出会い（あるいは戦って）成長して帰宅するのに対して、女の子はおつかいを終えて帰宅すると「小さい母」となる姿が浮かびあがってきた。

このタイプの絵本の集大成は、センダックの『まどのそとのそのまたむこう』（図1）だろう。主人公のアイダは、ゴブリンにさらわれた妹をとりもどすために（自主的に出かけるが、子守りを頼まれていたので「おつかい」と言えなくもない）、森（＝異世界）に行く。この絵本は、表層の物語の奥にあるものが複雑でわかりにくいのだが、アイダの旅は、妹に対する憎しみや嫉妬を克服する旅らしいことが読みとれる。[注1] アイダの母親はぼんやりとしていて心ここにあらずという風情であり、手足が非常に小さく描かれている。反対にアイダの手足は大きくがっしりとしていて、彼女の強い意志を反映している。アイダは萎縮した母親に代わって（「小さい母」となり）、さらわれた妹を取り返すという大きな課題を解決する。だがさらったゴブリンとは誰かというと、どうやら本人（の複雑な心）ではないか、と思わせるところがある。一筋縄ではいかないところがいかにもセンダックらしいが、小さい母のポジティブな側面とネガティブな側面が両方とらえられていて、深みのある絵本となっている。

連載の第四回目で、男の子の冒険絵本として『かいじゅうたちのいる

（図1　『まどのそとのそのまたむこう』モーリス・センダック作、脇明子訳、福音館書店、1983年）